

妻が入院したのは三年前。ある日「気持ちが悪い」と倒れた妻。その妻を車に乗せ、病院に連れて行った私。結果妻の妊娠がわかった。めでたい反面、妻の場合悪阻がひどいこともわかった。

妻が入院して一番困ったのはこの私だった。しつかり者の妻はあらゆる品物を整理整頓していた。彼女に任せっぱなしの私は、どこにあるのかさっぱりわからない。ゴミを捨てたいが、肝心のゴミ袋がみつからない。お金を引き出したいが、通帳が何処にあるかわからない。入院した直後はそんな些細な点で毎日右往左往した。

食事も困ったことの一つだった。妻は料理上手で、残った材料から料理を作り出すのもうまかった。食費がそれで抑えられていたのだが、入院したとたん毎月の食費は跳ね上がった。私が弁当や外食に走ったからだ。いや、正確に言えば、料理にチャレンジして失敗した結果がこうだった。妻のいない生活がどれほど不便なものかを思い知らされた。

その他にも洗濯、掃除、商品の買い置き、来訪人や電話の応対等々。面倒なことを妻に任せておいたせいで、それが一気に自分に回り、辟易した。だが、本来は予期された事態だった。結婚して妻が妊娠すること。そのときは、私が何もかもやる必要があること。その時期がいつなのかは未定だったが、いずれ私たち夫婦に訪れることだ

った。ただ私は、それを先送りして考えていたのだった。

せめてもの救いは、一人で過ごす時間が増えたこと。好きな映画を観たり、美術館・博物館を回ったり、ドライブをしたり。妻には申し訳ないが、独身時代の自分を取り戻せたのは、妻の入院の付加価値に違いなかった。

とは言っても、メリット、デメリットを考慮すると、妻の存在感はやはり大きかった。妻の入院によって初めて妻の有り難さを知ったのは事実だし、妻無くしての自分があり得ないことも知らされた。入院によって妻の大切さを教えられたのは皮肉だが、私には結婚を、自分をみつめなおすいい機会になった。

あれから時間を経て、息子は二歳の誕生日を迎えた。毎日家事に・育児に奮闘する妻をみると、やはり我が家には妻が居ないとだめだなと思う。息子も妻にべったりで、居ないと大泣きをする。私もまた同じで、妻が居ないと右往左往する。

妻よ、子供が二人居るみたいで申し訳ないけれど、これからも付きあってください。